

昨年夏、ニューヨークに滞在中、私は「移住：変容の中の人間性」という写真展を見に行きました。ブラジル生まれのセバスチャン・サルガドが、6年かけて撮った40カ国あまりの移民や難民・避難民達の写真のコレクションです。災害や経済危機、内戦、飢饉などの「不条理」に巻き込まれ、そこから生き残りを賭けて移動する人たちの、多様な表情がそこにはありました。

例えば、旧ソビエトからイスラエルに向けて出国しようとするユダヤ人達、クロアチアに逃れようとするボスニア難民達、メキシコから闇に紛れて米国へ忍び込もうとして国境警備隊につかまった男性達、ブラジルで路上生活を強いられポンドを吸って悲しみを麻痺させる子ども達、人が溢れるほど詰め込まれた香港の難民収容所……。

喜びの顔、悲しみの顔、希望と絶望、生命のきらめきと残酷な死の影……。人間の悪意も、醜さも、恐怖も、怒りも、すべてそこには映し出されていました。

移動を引き起こす元になった悲劇の重みと、移動が新たに生み出すであろう喪失や憎しみや悲しみ。国境の恣意性と残酷性。一人の人間が占めることのできる空間の極端な格差や生活レベルの段差。そこからさらに生まれる差別意識や排除行動の惨さ。

法のもつ保守性や、「所有」ということの根本的な意味についても、考えずにはいられませんでした。ストリートチルドレンの盗みも、都市ゲッターでの暴動も、パスポートなしの国境越えも、「違法」であり「犯罪」なのですから。ようやくたどりついた国の土地は、すでにくまなく誰かに所有されており、木陰につかま身を休ませることも、「不法侵入」になるかもしれないのですから。写真展の中の、希望を募って撮ったという子ども達のポートレート集さえ、彼らに所有権があるわけではなく、子ども達には、自分の写真を見る機会も焼き増しを頼む機会も---この写真展を訪れる機会などはいうまでもなく---なかったのかもしれないのですから。

もちろん写真展は、何があっても生きのびようとする、そのためにはどこまでも移動していこうとする人間の果てしないエネルギーに溢れてもいました。定住ではなく移動や漂泊が人間の本質なのだと改めて私は確信しましたし、みすばらしいスラムの片隅で生まれたばかりの赤ん坊の写真に、思わず「ソレデモ、ワタシタチハ、ハンショクシテイル」と内田春菊ふうにつぶやいてみたりもしました。移民の国アメリカ、移民の街ニューヨーク。多くの漂泊者にとっての最終目的地。ニューヨークでの写真展の最終日は9月9日だったようです。

8月のニューヨークは平和な陽光に輝いていました。

写真展を見終わって、私はミュージアムショップに立ち寄りしました。そこで「退屈絵葉書」というのをみつけました。それは、味も素っ気もない写真の絵葉書ばかりを集めたものでした。マンハッタンを一步出れば、アメリカのそこここで見られる風景、郊外のショッピングモールの建物だとか、高速道路だとか、モーターの外観だとかを、大枠でとらえた写真の束。芸術的な「美」とは無縁な、いえ、機能的な「美」さえも感じがたい写真の束。保存価値はなさそうで、撮影者の名前も不明なものが多い写真の束。まさに退屈な写真の束。けれどもそれは確実に、ある種のアメリカらしさを映し出してもいました。米国生活の長かった友人に、写真集がウケることを確信し、そのあと手元に大事に

置いておくことはないとしても、そのおもしろみをわかる人に写真集がまた手渡されていくことを想像しながら、私は大枚25ドルを支払ったのでした。

帰国して、友人にその写真集を手渡したのは「9.11以降」でした。アメリカは、もはや退屈な国ではなくなってしまっていました。退屈絵葉書は、私にとって「9.11以前」の象徴となりました。

あの退屈さは、鄭暎恵さんがいう、カナダに逃げ出した香港の中流階級の移民が耐えきれなかった清潔な多文化主義、「理性的・合理的・人工的」な「文化的砂漠」とも共通しているのかもしれませんが。

退屈でなくなったアメリカは「感情とパッション」を取り戻し、移民同士が「おかしくも親しくもないのに、ほほえみを交わし合」うのをやめました。一方で、大塚和夫さんの言うように、テロリストという「病原菌」、異物を根絶した「清潔な地球社会」を実現するための管理を着々と始め始めました。抗生物質は病原菌どころか身体に不可欠な菌をも、時には人体をも直接攻撃することがあるのに。抗生物質は、さらに強力な耐性菌を生む原動力でもあるのに……。ここは、サナダ虫のキヨミちゃんをお腹の中に飼っているという寄生虫学の藤田紘一郎教授あたりに、在米日本大使になってもらうよりほかないのではないかと、私は思ったりします。

11月にニューヨークを再訪したとき、ショックなことがありました。「こんな時期に外からやってきてそんな風に意見を言うなんて！」そんな言葉がある人から返ってきたのです。彼女はトラウマサバイバーの治療について素晴らしい本を書いたセラピストでした。夏に本を読んで感動し、講演を楽しむに聞きにいったら、その中で「戦争は9月11日に始まったのだ」と彼女は言いました。「サバイバーは自分を責めすぎてしまう」という文脈の中で語られた言葉だったのですが、それは明らかに報復爆撃を正当化するものでした。あんな素晴らしい本を書く人と分かり合えないはずはないという思いもあって、私は彼女に自分の感じた違和感を伝えようと思いました。そうして返ってきた言葉だったのです。彼女は傷ついていたのかもしれませんが。知り合いに犠牲者がいたのかもしれませんが。けれど、私も深く裏切られたように感じました。「感情とパッション」が高まったときには、しょせん異邦人は排除されるしかないのでしょうか。

3月11日、私は三たびニューヨークを訪れ、世界貿易ビルの跡地 --- グラウンド・ゼロ、爆心地という言葉がこの場所の固有名詞として使うことには、とても抵抗があります --- から夜空にまっすぐ延びる2本の光のメモリアルを、聖ポール教会のそばで見上げていました。「催し物はここじゃない、今から急げば歌には間に合うかもね」と警官が観光客に親切に案内するのが聞こえました。幸い「アメリカ、アメリカ」という歌声はそこには届きませんでした。光は直進性という性質をもつのだなあ、と私はその時、なんだか当たり前のことを考えていました。

光のまっすぐさは、うらめしいほどです。啓蒙という言葉は、英語では Enlightenment、闇に光を照らすという意味を持ちます。自分が教える主体であること、知識を持ち、他者より秀で、他者の蒙を啓く義務がある主体であることを疑わない、まっすぐな視線とそれは共通します。光源は常に欧米にあり、危険な闇を照らし、「無知蒙昧」な輩に光明を与えるのです。

ずっと以前に別のところで見た情景が、いえ、まさに「光景」が、フラッシュバックしてきます。

似たような光。レーザー光線のような直進性の光。けれどもそれは回っています。サーチライトです。潜んでいるテロリストをあぶり出すサーチライト。守られる側からすれば、安全の証。

場所は、ヨルダン川西岸のヘブロンに近いユダヤ人入植地。鉄条網に覆われ、近くにイスラエル軍が手厚く配備されている、紛争の地。その旅についてはすでに書いたことがあるので、詳しく述べませんが（拙著『異文化を生きる』をご覧ください）、私はそこに数日間滞在し、自爆テロのターゲットになりやすい入植者用のバスでエルサレムに通ったのでした。

ニューヨークにおいて、光のメモリアルは、透明な追悼感情を表すものと受けとめられるのでしょう。まっすぐ天に吸い込まれていく、物質性を欠いた、まぼろしのような光。それはまさに、あの日あの場所で忽然と消え去った者たちの、魂のありかを指し示していると言えなくもありません。けれども、同じ光が、サーチライトとして、国境を越えようとする不届き者の姿を浮かび上がらせ、アメリカ都市ゲッターの夜間外出禁止を促し、法や命令に逆らおうとする者を「テロリスト」としてあぶり出し、光に捕捉された姿には容赦なく銃口が合わせられるのだということを、忘れるわけにはいかないのです。自主投降によって、もしくは御慈悲によって、ひきがねが弾かれずにすむことは多いとしても。

（終）